

## 第 70 回 通常 総 会 日本鉄鋼協会 創立 70 周年記念式 報 告 第 109 回 講演 大会

本会は大正 4 年 (1915 年) 2 月 6 日に創立されて以来今年で 70 周年を迎えた。

創立 70 周年記念式は、第 109 回講演大会の前日の昭和 60 年 3 月 31 日 (日) 午後 1 時より東京工業大学講堂において、第 70 回通常総会に合わせて挙行された。

会場はステージ壁面を濃紺の幕を掛け、正面上部に白地に金砂子を散らした墨書きの看板、壁面左側に日本国旗、右側に日本鉄鋼協会旗を掲げ、ステージ前面を生花で縁取る簡素ながらも記念式典にふさわしい飾付けが施された。

第 70 回通常総会・創立 70 周年記念式は、特別表彰受賞者、新名誉会員、一般表彰受賞者、各界の来賓ならびに会員等約 650 名出席を得て、午後 1 時より日本鉄鋼協会木下亨専務理事司会のもと開会した。

開会に際し冒頭、石原重利会長から次の挨拶があつた。

本日ここに日本鉄鋼協会第 70 回通常総会ならびに創立 70 周年記念式の開会に当り、一言ご挨拶を申し上げます。

本来であれば、内外より多数の来賓のご臨席のもとに盛大な記念式典を挙行して喜びを共にすべきところではありますが、諸般の情勢、特に内外鉄鋼業の現状を勘案し、特別表彰、特別講演ならびに祝賀会の行事を行い、簡素ではございますが、本席において 70 年の重みを十分に噛みしめて参りたいと考えるものであります。

本会は大正 4 年 2 月、700 名の会員をもつて設立され、爾来 70 年数々の困難を克服しつつ、我が国鉄鋼業の発展と共に生長し、現在では会員数も優に 1 万名を越え、極めて大きな学協会の一つに育ち、国内はもとより海外諸国よりも権威ある団体として評価されるに至っております。誠にご同慶に存ずる次第であります。

鉄鋼の生産について、試みにこの 70 年間の粗鋼を計算致しますと 22 億 t の多きに達し、またこれを戦前、戦後に分けて見ますと、戦後では実にその中の 99.5% を占めており、特に昭和 30 年代に入つてからの大きな進展には目を見はらせるものがあります。この間、協会が果たした役割もまた少なからざるものがありました。戦後はいうに及ばず、否、恐らくそれ以上に創草から昭和 10 年代にかけての困難な時代も含めて、鉄鋼技術者・研究者の技術的なより所として、あるいは研さんの場として、協会は常に大きな役割を果たして参りました。国富の増加のために、あるいは他産業の要請にこたえるべく、あるいはまた豊かな社会の建設、貿易立国の国民的要望をうけて研さんに励まれた諸先輩の労苦と同時に、またその喜びは今私共の顔前にほうふつとして浮んで来るところであります。

私共は、本会を創立された野呂初代会長、その他の先達の先覚者としての明に深く敬意を表し、またこの 70 年間、協会の活動を盛りあげてこられた諸先輩の偉業に深く憶いをいだくと共に、今後 21 世紀に向けて更に努



写真 石原会長の開会挨拶

力を怠らず研さんに励み、もつて鉄鋼技術の進歩、鉄鋼業の発展に貢献すべく、ここに覚悟を新たにします。

70年の歴史をふりかえりもう一つ強調すべきは、ここ2~30年来の国際化の中における協会の貢献であります。鉄鋼の学術・技術の国際交流の現状は会員諸兄のよく理解されているところでありますが、これは日本鉄鋼業にとつても極めて有意義なかつ喜ぶべきことであると考へます。我が国鉄鋼業の発展は、戦後まもなくして先進国の技術に学び、更にその技術、設備を導入し、これに技術研究の成果を加味して、積極的に技術革新を行つてきたことによるところ大であつたと考へます。もちろんわれわれが作り上げた新しい画期的知見も少なくありませんが、底流をなした技術交流の恩恵はまことに多大であつたと申せましょう。この意味におきましても、日本鉄鋼技術界としては今後更に研さんを積み、我々自身の為にも、また諸外国鉄鋼業の繁栄のためにも、なおいつそこの交流に努力を致すべきものとする次第であります。

さてここで、現下の鉄鋼業の実情にいささか目を転じてみたいと思ひます。

昭和59年の粗鋼生産は、ほぼ1億600万tを記録いたしました。これは低迷をつづけた前年度に比べて8.7%の増加にあたりますが、史上最高であつた昭和48年度の1億2000万tにはほど遠く、ここ数年の推移を見ましても増勢は止まり、いわゆる低成長時代に突入したものと見られております。また、いわゆる「重厚長大」から「軽薄短小」へ「消費は美德」から「資源の節約」へという社会一般状勢の方向転換を反映して、鉄鋼素材に対する需要業界の要請も大きく変化してきていることはご承知のとおりであります。

今後、日本鉄鋼業がどのような推移をたどることになるのか、これには石油危機に端を発した世界経済の構造変化、あるいはまた価値観の変遷などが根底にあり、それぞれ複雑にかかわりあつており、従つて将来への展望にも難しい面が少なくないように考へられます。かつまた最近の輸入鋼材の急増、貿易摩擦の問題には今後の鉄鋼業のむづかしさを十分に予想させるものがあります。

日本鉄鋼業の衰退は許されないことと考へます。我々は諸先輩がきずきあげられた世界に冠たる地歩を維持し、更に確固たるものにしていかなくてはなりません。そしてそれには技術の開発・革新以外に道のないこともまた自明であります。この開発・革新によつて新しい鉄鋼生産技術、新しい鉄鋼材料、21世紀に向けた新しい鉄の姿を作りあげていかなくてはならないと考へます。

皆様ご承知のように鉄鋼協会は極めて多岐の活動を行つております。春秋の講演大会は回を追うごとに活発となり、「鉄と鋼」「Trans. ISIJ」の充実もまた国際的に高い評価を得つつあります。共同研究会をはじめ各種の研

究会も十分に成果をあげており、産学連携の実を挙げると共に、研究者・技術者の意欲を高め、新たな研さんへの場になつておると考へております。その他の活動も含めて、協会の働きは十分に機能していると思へます。

しかし、日本鉄鋼業のありよう、これからのことを考へます場合、いかに対処していくべきか。これはもちろん経営企業体自体の努力が主たるものに違いありませんが、協会としても大きな側面的バックアップの期待されるところであり、また会員としての技術者・研究者の研さんの大きく要請される場所でもあります。

ここに私は本会の輝かしい歴史を顧みると共に、今後更に創立の理念達成に努力を傾注する覚悟であります。しかしながらこの目的を達成するためには、会員各位のご協力に待たなければよくし得ないところでありまして、諸兄のいつそのご理解、ご支援をお願い申し上げる次第であります。

なお、終わりにになりましたが、本日の通常総会ならびに第109回講演大会の会場として、諸施設の利用について東京工業大学の大変なご厚意をいただきました。誠にありがたく厚く御礼申し上げます。

挨拶が終つて、石原会長が議長となり議事に入つた。付議された案件は次の3件である。(1206ページ参照)

議案第1号 昭和59年度事業報告、収支決算ならびに財産目録の件

議案第2号 昭和60年度事業計画ならびに収支予算の件

議案第3号 理事、監事ならびに評議員選挙の件  
議案審議の都合上、初めに議案第3号理事、監事ならびに評議員の選挙が行われた。選挙管理委員に田中千秋君(金材技研)、大橋徹郎君(新日鉄)を選び、投票後別室において開票作業に入つた。続いて議案第1号ならびに議案第2号は関連しているもので、一括議案として事業と会計に分けられた。

昭和59年度事業報告ならびに昭和60年度事業計画について濤崎忍理事(企画委員長)から次の説明があつた。

「昭和59年度事業を報告し、併せて昭和60年度事業計画をご説明申し上げます。

まず昨年の総会に際し石原会長のご挨拶のなかで、①本会事業は会員の意向を重視すべきである、②産学連携をさらに進める必要があるのではないかと、③業務運営の効率化をはかること、などを内容とする方針が述べられました。さらに理事会、企画委員会へも要望されましたので、昭和59年度は順次検討して参りました。したがって昭和59年度以降の事業は徐々にではございませぬが反映して参るものと存じます。

先ほどの会長の挨拶にもございましたが、本会は昭和 60 年 2 月 6 日創立 70 周年を迎えましたので昭和 59 年度は創立 70 周年記念事業の計画を進め、60 年度にかけてその実施をはかつております。まず 60 年 2 月 6 日に物故会員追悼会を開催したのを始め、会誌「鉄と鋼」と「Transactions ISIJ」の特集号として「わが国における最近 10 年間の鉄鋼技術の進歩」を編集し、「鉄と鋼」はすでに 3 月号で発行し、続いて「Transactions ISIJ」は、本年 7 月号と 8 月号に分冊し発行する予定であります。また、本会の 20 年間のあゆみを中心とした「日本鉄鋼協会史」の編集も進めてまいり、本日皆様にお届けいたしました。

主要事項の第二として、会員の意向を採り入れた事業の一つといたしましては最近われわれの周辺では、新しい材料の研究、開発にも乗り出す気運が強まっております。また、鉄鋼がいずれ新しい材料あるいは先端技術とかかわりを持つことを考え、本会も講演大会や会誌へ新しい分野として、萌芽・境界技術部門を設け、今講演大会より実施いたしました。おかげをもちまして、会員各位の深いご理解をいただき、チタン合金や複合材料など新しい部門の研究、開発、利用技術に関する 60 件もの講演の投稿があり、従来講演と合わせ、春季講演大会としては最高の 776 件の講演件数となりました。

次に産学連携の推進につきましては、昭和 59 年度においてまず従来の各種共同研究のあり方を検討いたしました。鉄鋼基礎共同研究会では 59 年度に「連続鍛造における力学的挙動部会」および「融体精錬反応部会」が終了しましたので「鉄鋼の急速凝固部会」と「高純度部会」の二部会が発足しました。

さらに、今後の産学連携のあり方につきましては、2 月に伊藤慶典氏を長とする委員会を発足いたしましたので、昭和 60 年度には、その指針が出されるものと存じます。

また、国際交流におきましては、昭和 59 年 6 月に日独セミナーを東京で開催いたしました。60 年度には 4 月下旬、日中シンポジウムが中国で開催されるのを始め、6 月に日ソシンポジウムが、また、9 月に鉄鋼圧延国際会議がそれぞれ東京で開催されることになっております。

これら国際交流につきましては、効率的運営の一つといたしまして堀川一男氏を長とする国際交流事業検討委員会で検討されておりますので間もなく結果が出るものと期待しております。

以上は、主として石原会長の三課題を中心に報告させていただきましたが、会誌の刊行、共同研究会、標準化事業、技術情報事業、鉄鋼標準試料事業、特別資金事業および ISO 幹事国業務等活発に行いました。

昭和 60 年度事業も会誌の内容充実、共同研究会をはじめ標準化事業、技術情報事業、鉄鋼標準試料事業、特

別資金事業および ISO 幹事国業務等さらに充実した事業を計画いたしました。特に創立 70 周年記念事業の一環として理工系の学生に、鉄鋼業および鉄鋼技術を理解し関心を持たせるため、「鉄鋼業とエレクトロニクス」「鉄鋼製造プロセス技術とエンジニアリング」「鉄鋼業における基礎技術」「材料開発と材料科学」の四コースに分けた製鉄所、研究所の見学会を計画しております。また学部学生の卒業論文の発表会を行うよう計画を進めております。

これらは初めての試みであり期待するところ大なるものと考えております。以上簡単にご説明申し上げましたが、最後に会員各位にいつそのご協力を賜り、本会事業が、日本鉄鋼技術の発展に大きく寄与するよう祈つて、私の説明を終わります。

次に久能一郎理事（会計担当）から昭和 59 年度収支決算・財産目録ならびに昭和 60 年度収支予算についての次の説明が行われた。

#### （決算）

まず一般会計決算の結果、収入は 9 億 1 913 万 270 円となりました。本年度は刊行事業収入をはじめ講演大会研修事業、情報事業、鉄鋼標準試料等の増収がありましたので、収入予算に対し 3 656 万 5 841 円の増収となりました。

一方、支出の部におきましての決算の結果は、調査研究事業、国際集會事業、技術情報事業、管理費等の節約ができましたので、創立 70 周年記念事業積立金および国際会議積立金の積み増しを含め支出総額は、8 億 7 021 万 8 981 円となりました。これは、予算に対し 1 234 万 5 448 円の支出減でございます。

この結果当期剰余金 4 891 万 1 289 円をもつて昭和 59 年度を終了いたしました。

#### （財産目録）

決算の結果、昭和 59 年度末現在の一般会計保有の純財産は 3 億 4 812 万 9 351 円でございます。

#### （別途資金会計）

別途資金会計は表彰ならびに事業資金ほか 16 の会計を保有しており、それぞれの目的に応じ特別資金運営委員会、理事会の議を経て支出し、または蓄積されております。これら別途資金会計の収支決算および期末保有の財産は別紙に示すとおりでございます。

特に本年度新設した研究振興資金は、壮少研究者の研究奨励並びに育成を目的としたもので事業につきましては今後十分検討して参る所存でございます。

#### （補助金等事業会計）

補助金等事業会計につきましては、12 の特別会計を有し、補助金、委託金あるいは他団体の分担金等により運営しております。ISO 幹事国業務会計、高級ラインパイプ研究会計をはじめいずれも充実した事業を行つてお

ります。

#### (予 算)

昭和 60 年度収支予算につきまず一般会計でございますが、昭和 60 年度も大変厳しい予算編成方針のもとに編成いたしました。収入の部では、前期繰越金を含め総額 9 億 3 634 万 3 289 円を計上いたしました。本年度は、会費値上げのご承認をいただきましたので会費収入の増加のほか、技術情報事業収入、鉄鋼標準試料、国際会議積立金からの繰入等の増収を見込んだものでございます。

一方、支出の部におきましては、刊行事業費では、和文会誌を本年度も 16 冊、欧文会誌 12 冊、特別報告書、会員名簿などの発行費を計上いたしました。

さらに、調査研究事業費につきましては、特定基礎研究費、鉄鋼基礎共同研究会費、圧延国際会議費のほかは、おおむね継続事業でございまして、内容の充実に重点をおき、極力節約を計りまして予備費を含め 9 億 3 634 万 3 289 円を計上いたしました。

#### (別途資金会計)

別途資金会計の予算は例年どおり特別資金運営委員会および理事会の議を経て事業計画をもとに編成いたしました。本年度は、石原・浅田研究助成金の件数を 6 件から 10 件に増やしましたが、そのほかはおおむね従来と変わりません。

#### (補助金事業等会計)

次に補助金事業等の会計でございますが、これらは大方継続事業でございまして、ISO 幹事国業務会計ならびに高級ラインパイプ研究会計等を予算化いたしております。

最後に、会費の値上げをご承認いただきましたことに対し厚く御礼申し上げますとともに本年度も予算の執行には細心の注意をもつて運営いたしますので、会員各位におかれましては、いつそらのご協力を賜わりたくお願い申し上げます。

以上のごとく議案説明が終わつた後、水野実監事から監査結果の報告があり、満場一致をもつて議案第 1 号、第 2 号が承認された。

続いて冒頭に行われた役員選挙の開票結果について、田中、大橋両選挙管理委員から全候補者いずれも絶対多数をもつて当選された旨報告が行われた。ここで会長、副会長、専務理事ならびに常務理事を選出する臨時理事会が開催され、会長に石原重利君(留任)、副会長に川合保治君(留任)、白松爾郎君(新任)、専務理事に木下亨君(再任)、常務理事に三井太佑君(留任)がそれぞれ互選された旨議長から報告された。これをもつて第 70 回通常総会を終了した。

## 表 彰 式

引き続き表彰式に移り、今回は創立 70 周年記念特別表彰と毎年度の一般表彰が行われた。

特別表彰：俵賞、製鉄功労賞、野呂賞の三種類の表彰が行われた。(1236 ページ参照)

**俵賞(金牌)**：国の内外を問わず鉄鋼業の進歩発達または学術技術の研究開発に画期的功績があり、国際的に声望の高い個人に贈られるもので、これまでに三島徳七博士、浅田長平氏、シェンク博士、フィニストン卿、オーストン博士、的場幸雄博士が受賞されており、今回 7 回目の受賞者として鉄冶金学の学術的進歩ならびに鉄鋼業の技術的向上発展に貢献された京都大学名誉教授・日本学士院会員沢村宏博士と、わが国鉄鋼業の進歩発達と海外協力に貢献された川崎製鉄株式会社相談役藤本一郎氏(病気のため欠席)が選ばれた。石原会長から賞状と金牌が沢村博士に手渡されると、会場からは沢村博士の功績を讃え、受賞を祝う盛大な拍手が送られた。

**製鉄功労賞**：過去 10 年間にわが国鉄鋼業の進歩発達または学術技術の研究開発に特別の功労があつた者に贈られるもので、今回は次の 10 名の方が選ばれ石原会長から賞状および賞牌が贈られた。

荒木 透殿	金属材料技術研究所前所長、(株)神戸製鋼所顧問
池島 俊雄殿	大阪チタニウム製造(株)代表取締役社長
岩村 英郎殿	川崎製鉄(株)取締役会長
奥村 虎雄殿	(社)日本鉄鋼連盟副会長・専務理事
高野 廣殿	日本鋼管(株)相談役
高橋 孝吉殿	(株)神戸製鋼所取締役相談役
館野 万吉殿	(株)日本製鋼所代表取締役社長
豊田 茂殿	新日本製鉄(株)常任顧問
不破 祐殿	東北大学名誉教授、新日本製鉄(株)顧問
盛 利貞殿	京都大学名誉教授、鉄鋼短期大学学長

**野呂賞**：初代会長野呂景義博士の遺徳を偲び、従来の協会事業功労賞を改称したもので、本会事業の推進に特別の功労あつた者に授与される。今回は次の 18 名の方々に、石原会長から賞状および賞牌が贈られた。

安藤 卓雄殿	東洋鋼鈑(株)参与
入 一二殿	元日本鋼管(株)
川村 和郎殿	新日本製鉄(株)第一技術研究所所長
神森 大彦殿	化学情報協会理事・事務局長
草川 隆次殿	早稲田大学理工学部金属工学科教授
郡司 好喜殿	住友金属工業(株)中央技術研究所主席研究員
神野 修一殿	日本鉄鋼協会中国四国支部前事務局長

染野 檀殿 鶴岡工業高等専門学校校長  
館 充殿 東京大学名誉教授, 住友金属工業(株)顧問  
田村 今男殿 京都大学工学部金属加工学科教授  
田中 良平殿 東京工業大学教授総合理工学研究科長  
田鍋 力殿 (社)日本鉄鋼協会参与  
中川 龍一殿 科学技術庁金属材料技術研究所所長  
中村 正久殿 長岡技術科学大学副学長  
長嶋 晋一殿 横浜国立大学工学部機械工学科教授  
細木 繁郎殿 新日本製鉄(株)専務取締役  
森 一美殿 名古屋大学工学部金属工学科教授  
吉田 道一殿 (社)日本鉄鋼協会参与

一般表彰: 特別表彰の後一般表彰式に移り, 上杉副会長が各賞の趣旨説明を行った。各賞受賞者は次のとおり。

**渡辺義介賞** 塚本富士夫殿  
**西山賞** 久松 敬弘殿  
**服部賞** 太田 豊彦殿 甲斐 幹殿  
**香村賞** 岡田 秀彌殿 佐伯 修殿  
**渡辺三郎賞** 大澤 秀雄殿 横田 孝三殿  
**佻論文賞**

佐藤 駿殿 川口 尊三殿 一伊達 稔殿  
吉永 真弓殿 松宮 徹殿 梶岡 博幸殿  
溝口 庄三殿 上島 良之殿 江阪 久雄殿  
谷口 直殿 林 美孝殿 片岡 恒男殿  
笹生 宏明殿 土井 一博殿 藪内 捷文殿  
大森 靖也殿 前原 泰裕殿 阿部 雅之殿  
日裏 昭殿 石田 清仁殿 西沢 泰二殿

#### 渡辺義介記念賞

石田 二郎殿 植田 嗣治殿 河野 拓夫殿  
後藤 和司殿 三枝 誠殿 阪本 英一殿  
戸田 龍殿 中倉 正雄殿 野寄 徳彦殿  
畑田 鉄男殿 服部 健殿 原 隆啓殿  
弘田 昇殿 藤井 靖治殿 柳沢 治明殿

#### 西山記念賞

伊藤亀太郎殿 乾 恒夫殿 井上 博文殿  
井上 泰殿 江見 俊彦殿 太田 定雄殿  
大中 逸雄殿 奥野 利夫殿 小野 清雄殿  
澤谷 精殿 高村 久雄殿 辻川 茂男殿  
新居 和嘉殿 新山 英輔殿 羽田野道春殿

感謝状贈呈: 本会事業の円滑な運営に当たっては, 多くの関係者の理解と協力を仰いでいるが, 創立 70 周年を記念して下記の方々のご尽力に対して, 会長から特別感謝状, 感謝状を贈呈し謝意を表した。

**特別感謝状** 元陸軍中将 田村 宣武殿

**感謝状**  
株式会社協会通信社 社長 河村 武雄殿  
研究社印刷株式会社 社長 平野 肇殿

有限会社新隆社 社長 山崎 はな殿  
株式会社双文社印刷所 社長 倉沢 直則殿  
株式会社高橋運輸店 社長 高橋 安起殿  
日本紙パルプ商事株式会社 社長 関 章殿  
株式会社日本サンプルプラント 社長 小林 稔殿  
株式会社社平和情報センター 社長 宮田 浩平殿  
株式会社方英社 社長 戸田 純一殿  
丸善株式会社 社長 海老原熊雄殿

#### 名誉会員推挙式

記念式は次いで名誉会員の推挙に入った。名誉会員はわが国鉄鋼業に対して功績・名望のある方の中から評議員会の議を経て推挙するもので, 今回は次の 5 名を新名誉会員に推挙した。

橋本 宇一殿 科学技術庁金属材料技術研究所客員(財)長岡技術科学大学技術開発教育研究振興会理事長  
松下 幸雄殿 東京大学名誉教授, 日本鋼管(株)顧問

Prof. Dr. rer. nat. Hans-Jürgen ENGELL

Max-Planck-Institut 鉄鋼研究所所長

Dr. Harold William PAXTON

United States Steel Corp. 副社長

魏 寿 昆殿 北京鋼鉄学院教授, 中国科学院技術科学部学部委員

推挙式はステージ向かつて左側に 5 名の新名誉会員が並び石原会長からそれぞれの業績紹介を行った後, 名誉会員推挙状および名誉会員章が満場の拍手の中 1 人 1 人に手渡された。また推挙式に同道した松下夫人, エンゲル夫人, パクストン夫人には花束が贈られた。なお新名誉会員から推挙後, それぞれ簡単な謝辞が述べられた。

以上をもつて日本鉄鋼協会第 70 回通常総会, 創立 70 周年記念式は滞りなく終了した。なお参加者には日本鉄鋼協会史が配付された。



写真 新名誉会員一向かつて左から橋本宇一博士, 松下幸雄博士, H-J. エンゲル博士, H. W. パクストン博士, 魏寿昆博士

## 特別講演会

総会・記念式に引き続いて創立70周年記念湯川記念講演会と受賞記念講演会が開催され、次の講演が行われた。

### 創立70周年記念湯川記念講演

The Changing Scenes in Materials

United States Steel Corp. 副社長

Dr. H. W. PAXTON

Research and Education at the Universities in  
Western Germany—Situation, Problems and  
Development—

Max-Planck-Institut 鉄鋼研究所所長

Prof. Dr. H-J ENGELL

### 受賞記念講演会

わが国ステンレス鋼の進歩発展

渡辺義介賞受賞者 日本金属工業(株)会長

塚本富士夫殿

表面処理鋼板の進歩

西山賞受賞者 東京大学名誉教授 日新製鋼

(株)常勤顧問 久松 敬弘殿

### 創立70周年記念祝賀会

記念祝賀会は昭和60年3月31日(日)午後6時30分より東京白金台の八芳園平安の間において開催された。当日は東京工業大学における第70回通常総会・創立70周年記念式、特別講演会に引続いて場所を移しての記念の宴であつた。折悪しく雨天に見舞われたにもかかわらず、特別・一般表彰受賞者、名誉会員をはじめ官界、業界、関連学協会代表等の来賓ならびに会員合わせて参加者は約500名を数えた。会場はステージ上部に本会のマークと創立70周年祝賀会を墨書した金砂子地の看板が掲げられ、フロア中央に桜を模した造花が置かれ、これを趣向をこらした数々の料理のテーブルで囲んでいた。祝賀会は鈴木朝夫東京工業大学教授司会によつて開宴となつた。石原会長の挨拶に始まり、来賓として出席の武田豊日本鉄鋼連盟会長、井垣謙三日本金属学会会長ならびに会場校東京工業大学早川宗八郎理学部長からそれぞれ別記の祝辞を受け、佐野幸吉前会長の音頭で乾杯の後、祝賀の宴に入つた。参加者は杯を重ね料理に舌鼓み、交歓を重ね盛り上がりを見せた宴なかばに祝いの助六太鼓が会場にこだまし参加者から盛大な拍手が送られた。会場は終始なごやかな雰囲気にあふれ70周年を祝うにふさわしいものであつた。なお参加者にはステンレス製の本立が記念品として贈られた。

(石原会長開会の挨拶)

創立70周年の宴を開くにあたりまして、ひとことご挨拶を申し上げます。

日本鉄鋼協会は大正4年の誕生ということで、ちょうど70才の宴になりました。古稀にあたるわけです。人生にも山あり谷ありといえますけれど、当協会もこの



写真 祝賀会風景

70年幾多の起伏を乗り越え、数々の困難と闘いながら、鉄鋼技術の発展の母体になるのだという固い信念で会員一同研鑽してやつてきたわけであります。

振り返つてみますと、やはり技術を通じて鉄鋼業の発展、大きく言えば日本経済の進展に、少なからず貢献できた70年ではなかつたかと考えます。特に少年期というか、中年期というか、戦前までの30年間、我々の先輩は、いろいろ技術が未熟ということもあつて大変苦勞されたと思われまふ。もつとも今は成熟したら成熟したで、それなりの苦勞はあるわけですが、私たちは先輩のご苦勞をしのびながら、今ここに鉄鋼協会とともにあることを喜び、これから協会の発展のためになお微力を尽くしていきたいと、私は心中深く期しておるところであります。

ご承知のように、世の中、ハイテクとか advanced technology で騒々しくなつておりますが、これはまた大変結構なことで、おそらく日本経済の発展上大きく寄与する動きだと思ひますが、どうも私どもの身体の片隅で、みなさん鉄のことを忘れてはいませんか、と聞いてみたくなるような昨今でもあります。しかし我々は、鉄の持つ良さ、鉄の持つたくましさ、そして鉄の持つ暖かさ、冷たさではなく暖かさを十分経験、承知しております。私は掛値なしにこれからも鉄の時代は続くと考えております。

今宵は、先人の偉業をしのび、これからの鉄の将来に希望を馳せてご懇談いただきたいと考えます。だいたい桜も遅れておりますがまもなく春爛漫の訪れであります。私が口癖で言うことですが、私どもは鉄の仲間でありまして鉄鋼の技術で結ばれた仲間でもありますし、また、同時に鉄鋼のような固い友情を誇る仲間でもあります。今宵は、大いに語つていただいて、また、古稀に達した協会を70年の鉄鋼技術を祝つていただきたいと思ひます。

最後になりましたが、今日は会員諸兄には多数おいでいただきましてありがとうございました。特に、私から見て先輩にあたる方々が、非常にお元気な姿で多数ご出

席いただきました私にとりまして感激ひとしおでございます。また本日はおくつろぎのところ、また足元の悪いところご来賓の方々、多数ご来駕賜わりまして、ありがとうございました。特に武田日本鉄鋼連盟会長、井垣日本金属学会会長ならびに早川東工大教授から祝辞をいただけることになっておりまして、大変光栄に存じております。今日は本当に午後からずつとお忙しいところありがとうございました。大いにひとつ意気軒昂に華やかにこの祝賀会を続けていただきたいと思っております。どうもありがとうございました。

(祝辞 日本鉄鋼連盟会長 武田 豊殿)

ご指名でございますので、皆様方のお許しをいただきまして、ひとことご挨拶申し上げます。

まずもつて日本鉄鋼協会さんが、今年をもつて古稀を迎えられた、つまり 70 年を迎えられたということでこれはまつたく喜ばしいことでございますして心からお祝いを申し上げます。と同時に、この良き日にそれぞれの分野におきまして鉄鋼協会にご功勞のあられた方々が、表彰を受けられたということ、また重ねてお祝い申し上げます。本当におめでとうございます。

伺いますと、日本鉄鋼協会が誕生いたしましたのは、大正 4 年 2 月 6 日だというわけでございます。今、石原会長がご挨拶なさいましたが、その当時石原さんは煙にもなっていないような状態です。当時野呂先生や俵先生のような大先達様が、日本の将来の鉄鋼業のいやさかのために協会をお作りになつた。大変先見の明のあられた方で、こういう類の協会というものはお聞きしましたら、世界に無いということでございます。本当にいい協会を持つたものだと感じております。

私、今、石原さんのお話の中に鉄は永遠であるというお話がございましたが、私、日本鉄鋼連盟の会長をいたしている関係もございまして世界鉄鋼協会の chairman をやらせていただいております。私が chairman に就任いたしました時に、ひとつのテーマを投げ与えました。といいますのはいろいろなことを申し上げてもいろいろ複雑な努力をしなければいけないから、今まで投下された infrastructure の実情を調べてみようではないかと提案し、各国の皆さんが私の意見に大賛成され作業を行いその結果が今年の 10 月ロンドンの総会でその報告がされます。中間的な報告の一つをちよつとご披露いたしますと、アメリカには、620 万 km の道路がある。そのうちの 193 万 km というのは、つまり highway ですが、この道路は 60% もはやだめでございます。193 万 km にかかっている橋は 57 万 km ありますが、これは 50% だめでございます。今後 15 年、2000 年までに、これを修築しよう、やれ renew しようということになりますと、お金の線で 7200 億ドルかかります。日本円に換算したら、莫大なものでございます。どつこい重厚長大まだ生きてるぞという事実があるのでございます。これを世界

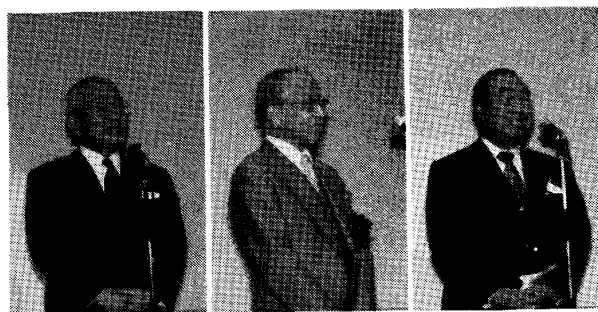


写真 4 祝賀会において祝辞を述べる来賓各位  
向つて左から武田豊日本鉄鋼連盟会長、井垣謙三  
日本金属学会会長、早川宗八郎東京工業大学教授

的に調べましたら、永遠といつてもいいほどの potential でもあるということでもまだまだ鉄は死にません。いわゆる先端産業と鉄との combine された cooperation の中に、いろいろなより良いものがでてまいります。

大変勝手なことを言うことで有名なロバート・カルビンさんにこの間シカゴの大会の時に招いて特別講演の機会を作りました。彼は我々は鉄鋼産業があるから生きておれるのだといわれました。彼の持論としては、脱工業化などというまぎらわしい発言はやめてほしい。1次、2次、3次産業があつてはじめて自分たちのいわゆる商売がなりたつんだ、一本立ちができるのだということをおっしゃっておりますが、そのとおりでございます。

私たちは今後先端を行くといわれるものを十二分に取り入れて cooperate していきより良い鉄の世界を作つていきたいと思つております。皆様方、諸先生方の今後のますますのご研鑽と、ご指導をいただければ日本の鉄鋼業界もますますいやさかなものになると私は信じております。簡単でございますが、ご挨拶とさせていただきます。

(祝辞 日本金属学会会長 井垣謙三殿)

金属学会会長の井垣でございます。金属学会を代表いたしましてお祝いのことばを申し述べたいと存じます。

金属学会と鉄鋼協会とは、きつてもきれない仲でございます。非常に大きいパートナーといつもおつきあいをするときに背伸びをしながらおつきあいをしておりという学会でございます。金属、広く全体を含めておりまして鉄の対象領域のひとつに含めさせていただいております。私どもはそのはしくれをつとめておるわけでございます。仙台という離れた地でございますは、田舎学会でございますが、東北新幹線が、つい先日上野との間に直通が走るようになりまして、2時間で参りますものでございますから、首都圏への通勤形体に仲間入りをやらしてもらえたのではなかろうかというふうに思っております。

鉄が地球上で非常に豊富な、しかも非常に有用な金属であるということにはまちがいございません。大量に生産される鉄が、日本の工業を発展させる上で大きく貢献し



ました。非常に苦しい時代から現代に至るまでその主導力として活躍されました功績ならびにご研鑽に対しまして心から敬意を表したいと存じます。

お月様は、今日はとても臨める状況ではございませんが、お月様は同じ面だけを地球に向けて動き回っております。地球から見ますと、あれがお月様の顔だと見えますが、宇宙時代に月の裏側も、これから我々は利用しなければいけないのではなからうかと思っておりますが、今までの工業鉄だけでない面を鉄はまだ多分に持っているように存じます。

どうか世界の第一線に伸び上がりました日本の工業、鉄鋼業、大いに裏側にも開発の手を伸ばされまして、従来の常識とかけ離れた新しい鉄、鉄の用途、鉄の活躍場所を大いに発展させていただきたい。およばずながら協力をさせていただきたいと存じております。今後のいつそのご発展をお祈りいたしましてお祝いのことばにかえさせていただきます。

(祝辞 東京工業大学教授 早川宗八郎殿)

本来ですと学長がこの場に立つて、ご挨拶を申し上げるべきでございますが、やむを得ぬ事情がありまして、私が代わりを務めさせていただいております。

東京工業大学をこの日本鉄鋼協会の70周年の記念の諸行事また講演会にご使用いただき大変名誉あることだと心からお礼を申し上げます。これは、おそらく私どもの金属工学科、その他の学科、また長津田の研究所・大学院、総合理工学研究科の材料科学専攻をはじめ、鉄あるいは金属に関係ある研究で皆様のご評価を受けているが故にご使用いただけたのだと理解して、心の中で誇りに思っているわけでございます。

70年という大変長い歴史だと思っておりますが、どうも鉄というのは人類が始まってまもなくから出てきております。紀元前1000年の時には、旧約聖書によりますと、ダビデがゴリアテという鉄皮を着た雄者と戦うという話があります。ミケランジェロ作の有名な若きダビデ像という像があるのをご存じだと思います。もちろんダビデはその時に鉄の鎧をサウル王から借りるのですが、とても身体に合わない、重くて動けない。大男のゴリアテを見ると鉄でちやんと武装されている。ただひとつだけ額があいていた。そこに羊を打つ、羊を守る時に狼を打つ。ライオンを打つための皮で石を投げる機械があります。それを持って、額に石を当ててゴリアテを倒すという話であります。これはある意味では、鉄というものの持った宿命であり欠陥を、紀元前1000年にすでに示していたのだと思います。ところが、その後の多くの研鑽・研究があつて、今日のように人間の生活に欠かせない鉄、あるいは鋼の需要というものがあつて技術があるということを思いますと、人間の力、技術力の大きさに感心いたします。

今日、多勢の研究者、また多勢の技術者が、また委員

の方々がこうしてここに集まつて、今は私も見ておりますけれどもおそらく全部の方が鉄と鋼を見ておられるかと思っております。

京都の大覚寺というお寺に、月見の間というのがあつて、そこには月が書いていないでうさぎが何匹かいるだけの絵があります。跳ねているうさぎもいれば、あそんでいるうさぎもいる。ところが、それぞれの格好をしたうさぎの目を見るとそれが全部その大覚寺でもつて仲秋の名目が出てくる方向に向いているといわれております。おそらくここにご出席の方々はそれぞれいろいろな研究をなさつておられるのですが、それぞれの立場で、方面は違ひながらも全部、目の向かっているところが、鉄か鋼かそういった世界なんだと思つて、これからの発展が本当に期待されるものだとむしろおそろしい力だというふう感じられます。

最後に東京工業大学の各学問の分野をご支援いただきたいと存じますと同時に学界と業界、官界がそれぞれの良き力を合わせてご発展に努力されることを心からお祈りいたしまして、70周年の記念の祝辞とさせていただきます。おめでとうございませう。

### 講演大会(第109回)

講演大会は4月1日、2日、3日の3日間東京工業大学で開催された。

講演：今講演大会より萌芽・境界技術ならびに製鉄・製鋼共通の部門が追加された。部門別講演数は次のとおりである。

製鉄 105 件、製鉄・製鋼共通 41 件、製鋼 139 件、加工・システム・利用技術 121 件、分析・表面処理 74 件、材料 236 件、萌芽・境界技術60件、合計 776 件が16会場にわかれ、講演ならびに討議が活発に行われた。

なお、507「ボイラーチューブ用鋼材の経年変化および余寿命評価」川鉄 松崎明博、他および720「海水淡化装置におけるチタン材料」笹倉機械 平石順久の2講演は欠講となつた。

討論会：上記一般講演の他、次のテーマによる討論会が開催された。

1. 高炉における装入物分布制御、座長 渋谷悌二(講演6件)
2. 高純度鋼製造における介在物の挙動  
座長 坂尾 弘、成田貴一(講演6件)
3. 電縫管の製造技術の最近の動向  
座長 神馬 敬、副座長 三原 豊(講演7件)
4. 薄板・表面処理鋼板の表面解析とその応用  
座長 新居和嘉、副座長 中岡一秀(講演10件)
5. オンライン分析技術の最近の進歩  
座長 大坪孝至、副座長 角山浩三(講演13件)

ジュニアパーティー：4月1日午後5時30分より東京工業大学食堂で開催され、若手技術者、研究者を中心に懇談がなされ親交を深めた。参加者 203 名。